

誰かが走ってくる。

表通りの方から路地を通って、小走りに走ってくる。ひどく急いでいるような、乱れた足音がひたひたと聞こえてくる。

何かあったのだろうか。誰か病気だろうか。薄い夜着をはぐって、お徳は寢床の上に身を起こした。耳を澄ますと、足音がお徳の家の裏口の前を通り過ぎてゆくのがわかった。まだ夜明け前、外は真っ暗で、身をのりだしてのぞいて見ても、裏口の腰高障子を横切る人影を見ることはできなかったけれど、足音からして身の軽い感じがする。

ひよつとするとお露ちゃんのところかもしれない——と思いついて、お徳は起きあがった。富平さんがいよいよいけなくなつたのだ。寝間着の上に綿入れを羽織ると、裸足に履き物をつっかけて裏口から路地へ出た。そのとき、富岡八幡様の鐘が遠く重く、夜明け前の暗がりのなかに響き始めた。明けの七つ（午前四時）の鐘だった。

路地に立つと、ずっと左手の先の二階家の裏口に明かりが灯っているのが見えた。あれはこの鉄瓶長屋の差配人、久兵衛の家だ。やっぱり何事か起こつたのだと思つた。寒さに震えながらお徳も小走りにそちらへ向かった。

久兵衛の家の裏口はきちんと閉められていたが、障子を照らす行灯の明かりのなかに人影がふたつ浮かんで見えた。低い話し声も聞こえてくる。

「ごめんください、差配人さん」と、お徳も声をひそめて呼びかけた。

するとすぐに、障子が開いた。やはり寝間着の久兵衛が、こちらを睨みつけるような怖い顔をして立っていた。

「誰だい——ああ、お徳さんか」

「すみません、こつちに人が駆けてくるのを聞いたもんだから」

「あんた、さすがに耳ざといね」

「もしかして富平さんかと」

久兵衛はお徳の顔から目をそらすと、障子の内側に縮こまっているもうひとりの人影の方に顔を向けた。お徳も一歩踏みだし、そちらをのぞきこんだ。

思ったとおり、それはお露だった。ほとんど色が抜けるほどに褪せてしまった縮の浴衣を寝間着に着て、乱れた鬚から後れ毛をいっぱい垂らして俯いている。痩せた顎を持ち上げてお徳の顔を見ると、お露の目が泳ぐように動いた。「お徳さん……」

日頃から青白く痩せこけたお露だが、今はそれに輪をかけて蒼白で、まるで絵双紙に見る幽鬼のような顔をしていた。お徳は思わずちよつと身をひいてしまった。亡くなって五年になる、亭主の加吉の顔を思い出した。死ぬ直前の、病に責めさいなまれてやつれ果てていた顔を。

それは不幸の顔だった。凶事の顔だった。

「お露ちゃん、おとつあんがいけなくなつたんだね？」と、お徳は囁いた。

お露の口元がわなわなと動いた。声は出てこなかった。お徳は思い切つて彼女に近づき、その身体からだに腕を回してやろうと思つて、そのとき妙なことに気づいた、お露の薄っぺらい浴衣のあちこちに、点々と黒っぽいシミが散っているのだ。ちょうど、洗い物をしていて飛び散つた水がひつかつたみたいに。

「お露ちゃん、これ——」

言いかけて、お徳は目を見張つた。黒いしみは、お露の浴衣の袖口そでぐちにもついていて。こちらは飛び散っているどころではなく、真つ黒にべつとりと。

「どうしたんだい、あんた」

お徳がお露の袖をとらえようとすると、お露はさつと手をひっこめた。が、お徳の手には濡れた感触が残つた。冷たいだけでなく、ぬるぬるした感じも。そして、お徳には馴染なじみのある、ある独特な匂いもした。金気臭いような、生臭いような——

血だ。お露は浴衣に血をくつつけている。

久兵衛が、内緒話のような低い声で言つた。

「死んだのは富平さんじゃない、太助たすけの方だ」

「太助さんが？」

太助は富平の長男で、お露の兄である。富平の家は、表通りの三軒長屋のいちばん北側で、八百屋を営んでいる。一年ほど前に富平が卒中で倒れ、ほとんど寝たきりになつてしまつてからは、店の方は太助とお露の兄弟で切り回しているのだつた。兄弟はよく助け合い、父親の面倒もかいがいしく見ていたけれど、富平は一向によくならず、もう長くはないだろうという噂だつた。だからお徳も、何

か変事が起こつたらしいと思つたとき、すぐに富平のことを考えるのだ。

それなのに、これは一体——

「太助は殺されたつていうんだ」と、久兵衛が言つた。台所の向こうの座敷の行灯の明かりを背負い、その顔は真つ暗だつた。息を呑んでお徳がお露をのぞきこむと、彼女はゆつくりと、焦点の定まらない目を土間の上に泳がせたまま、操られるようにしてうなずいた。

「兄さんは殺されたんです」

「誰が殺したつていうの」

「殺し屋が」と、お露は言つた。教えこまれた言葉をそらんじるような一本調子の口調だつた。

「殺し屋が来て、兄さんを殺してしまつたんです」

そうして、ぶるぶると震え始めた。開いたままのお露の目から涙がぼとぼとこぼれ落ちるのを、お徳は呆然と見つめていた。

鉄瓶長屋は、小名木川おなぎがわと大横川が交わるころ、新高橋しんたかばしのたもとに近い深川北町の一角にある。北町は南北に細長く、鉄瓶長屋はそのなかでも南側、小名木川寄りに建っている。大横川沿いにのびた表通りに面して、二階建ての間口二間の三軒長屋が二棟、その南側、つまり新高橋にいちばん近いところ、行灯建ての二階家がひとつ。ここが差配人の住まいである。裏通りには、間口一間半の棟割りむねわりの十軒長屋が一棟。この裏長屋は、すぐ西側にある藤堂和泉守とうどういずみのかみ様の大きなお屋敷と背中合わせに建っており、お屋敷とのあいだには、小名木川から引き込まれた細い堀割が流れている。おかげで一年中何となくじめじめとした風が吹く。ただ、小名木川を行き来する物売りのうろろうる船が、この堀割ま

で入ってきてくれるという便利なところもあった。

鉄瓶長屋というのは、もちろん通称である。この地所に今の形の長屋が建てられたのは、十年ほど前のことだ。できたばかりのころは北町長屋と呼ばれていたのだが、初めて裏長屋の共同井戸の汲みかえをやったとき、どういうわけか、大して深くもないその井戸の底から、赤く錆びた鉄瓶がふたつも出てきた。それ以来、鉄瓶長屋と呼ばれるようになったというのが由来である。

鉄瓶長屋の地所の持ち主は、築地の湊屋総右衛門という地主である。湊屋は俵物を扱う問屋で、お店も築地にあるのだが、総右衛門は他にもいくつか地所を持つているだけでなく、明石町で「勝元」という威勢のいい名前の料亭も営んでいる。古くからの地主ではなく、前身はどうもはつきりしない。実は、総右衛門が現在の財を築くに至ったいちばんの理由は秘密の高利貸しにある——という噂もある。鉄瓶長屋の地所も、そうした高利貸しのかたに取ったものだと囁く向きもあり、言われてみれば、築地の地主がぼんと離れた深川に飛び地のように地所を持っているのもいわけありげだし、鉄瓶長屋が建つ以前には、同じ場所に大きな提灯屋があったのだが、ある時期に急に傾いて家も店も手放したということもあつたりして、この噂には密かにうなずく者が多い。

まあしかし、間借りのその日暮らしてある鉄瓶長屋の住人たちには、地主が誰であろうとそこにどんな事情があろうと、ほとんど関わりのないことではある。彼らにとつては、名主や地主よりも、いちばん身近に接する機会の多い差配人の人物こそが問題であるからだ。そしてその差配人である久兵衛は、鉄瓶長屋ができるまでは、ほかでもない「勝元」の番頭のひとりであった。長年住み込みで働いており、算盤もはじければ客あしらいも軟らかく、人を使うのも巧いというので重宝がられていた人物である。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎ 注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。